

蝶の翅たたためば模様かさなりぬ

藤田湘子

俳句一読の瞬間、「あ！」と気付かされる。あるいは、「何だそんなことか」と読み捨ててしまう。この違いは実に大きい。個人の感性や生活、人生、生き様にまでその影響はおよび、言葉や書物で教えられたとしても、容易に会得して真似のできるものではない。

禅語の『せきしゆおんじよう隻手音声』や『ねんげみしよ拈華微笑』を分かつうとしても、頭や理性だけでは駄目なのと同じである。

科学的には、顕微鏡で観察すれば蝶の翅の鱗粉配列さえも拡大でき、翅の色や模様は反射光や構造色から生まれるため厳密には重なるとは言いがたい。しかし、肉眼で蝶を観察していれば、翅を閉じた瞬間に翅の内側でその模様が重なったと感じてしまう。これが詩心であろう。

1997年 (H9作) 第十句集『神楽』 鑑賞・轍郁摩